

肝臓移植を乗り越えて 授かったのちに感謝して。

鹿児島教会 飯ヶ谷悦代さん

飯ヶ谷悦代さんは、20代のときから肝臓の病を抱えながらも、仕事と家事に勤しんできた。だが、40代の半ばには、腹水が溜まり、足にむくみの症状が現れた。料理から洗濯まで家事一切を夫が代わり、むくんだ足のマッサージまでしてくれるのに、感謝するどころか「病気のだから当たり前」と思っていた。平成27年、肝硬変とがんが見つかり、「肝臓移植をしなければ余命半年」と宣告される。飯ヶ谷さんは当初、娘がドナーになるため頑なに拒んだが、家族や周りの人びとの懸命の説得により、移植を決意した。手術後に夫に感謝を伝えると、いつも寡黙な夫は、「よかったな」とつぶやき、目から涙をあふれさせた。義母を肝硬変で亡くし、同じ病気の妻が、生きる気持ちちを失ってしまっていたことに夫はどんなに苦悩していたのか……。結婚して30年、ようやく夫の気持ちに思いを寄せることができたのかと思うと、心が痛んだ。手術から5年が経ち、何度か入退院をくり返したものの、体調は安定している。飯ヶ谷さんは、支えてくれた人びとへの感謝を胸に、精いっぱいいまを生きている。



心の声に耳を澄まそう

宗教的な懺悔ざんげということでは、心にきざす反省や懺悔の気持ちを内なる仏からの呼びかけと受けとめることができず、法華経の結びの経典といわれる仏説観普賢菩薩行法経で「汝当に仏を念ずべし」と懺悔をうながす一節も、私たちが怒りや欲に負けそうになったときに、「自分のなかの仏を見つめなさい。真実の自分に帰りなさい」と諭す内なる仏からの声に耳を傾けることを教えているのでしよう。ときには広大な宇宙に心を遊ばせ、地球や生命の歴史を想う。人間と自分という存在のありように思いを凝らす。そうして、自分の内なる仏と向きあい、その声に耳を澄ませば、よりよく生きる心がととのっていきのだと思えます。あとは、実践あるのみです。

日蓮聖人は「二代の肝心かんじんは法華経、法華経の修行の肝心かんじんは不軽品ふきやうほんにて候なり」といわれました。法華三部経を所依の経典とする本会で、開祖・庭野日敬が率先して合掌礼拝を大切にしたのは、常不軽菩薩の姿勢こそ、人のふるまいのお手本と受けとめたからです。それは、懺悔という悟りを身で示す、最も身近な実践といえるかもしれません。

立正佼成会